

招魂祭は、現在の護国神社が招魂社と称していた1939（昭和14）年以前に、戦争などにより死去した軍人らを慰霊する目的で執り行われた祭事である。日清



1885（明治18）年11月15日、造道練兵所で行われた招魂祭の様子を描いた図（青森県立郷土館蔵）

同青森県域においても、同様に招魂社が創建され招魂祭が行われていた。弘前藩では、1869（明治2）

年6月、弘前の宇和野（現在の弘前市小沢・大開地区）を慰霊した。これに先立つ5月には、大星場に招魂堂が建てられ、上記の293名が合祀された。

弘前藩による戦没者慰霊祭となったようだ。同社は前記の他藩の戦没者のうち薩摩・長州・水戸の藩士など16名が埋葬されており、その関係から祭場に選ばれたと考えられる。

青森の招魂祭

髙谷 大輔

（県民生活文化課
県史編さんグループ非常勤嘱託員）

動員した大規模なものであった。

さらにその翌年9月には、同地付近の大星場（砲術訓練所）で再び招魂祭が実施され、新たに確認された戦没者を含む67名と、弘前藩の援軍として派遣された千葉県沖で遭難・水死した熊本藩関係者208名、箱館戦争で負傷

し青森において死去した他藩の軍兵18名の計293名を慰霊した。これに先立つ5月には、大星場に招魂堂が建てられ、上記の293名が合祀された。

不明だが、結局招魂本社で招魂祭は行われず、廃藩置県後の1872（明治5）年5月に広田神社（当時は現在の青森市役所敷地の一部にあった）で行われた招魂祭が、青森で最初の招魂祭となったようだ。同社は前記の他藩の戦没者のうち薩摩・長州・水戸の藩士など16名が埋葬されており、その関係から祭場に選ばれたと考えられる。

原別野（現青森市原別）に決定した。これにより、青森の招魂社が本社に位置づけられることとなった。

翌年から箱館戦争戦没者の招魂祭は毎年5月18日に開催されることになったものの、この段階で原別野の本社は完成しておらず、招魂祭は弘前で行われた。資料の関係からその後の動きは

不明だが、結局招魂本社で招魂祭は行われず、廃藩置県後の1872（明治5）年5月に広田神社（当時は現在の青森市役所敷地の一部にあった）で行われた招魂祭が、青森で最初の招魂祭となったようだ。同社は前記の他藩の戦没者のうち薩摩・長州・水戸の藩士など16名が埋葬されており、その関係から祭場に選ばれたと考えられる。